

# 古代ギリシア・デルフォイ (ΔΕΛΦΟΙ) 巡礼 —アポロンの神託祭儀—

## Pilgrimage to Delphi in Ancient Greece: Rites of the Oracle of Apollo

山 川 廣 司  
Yamakawa Hiroshi

Pilgrimage in the pantheistic world of ancient Greece took various forms. Previously I have considered the healing rites of Asclepius that developed at Epidaurus, which invited pilgrimage in search of cure of disease, of benefit in this world, rather than peace in the next life.

Pilgrimages seeking divine judgment that surpassed the decisions of human intellect were also popular. From individual matters such as birth, marriage, and business transactions to important public matters related to the affairs of state such as changes in rites and government, colonial activities, and decisions regarding war and peace led people to places sacred to the gods to receive the judgment of Apollo, the god of prophesy, or the omniscient Zeus. To well known places of divination such as Delphi (Apollo), Dodona (Zeus), and Didyma (Apollo), many people from within the country and abroad came to call upon the oracle. Delphi, situated on the steep southern slope of Mount Parnassus and sacred to the prophetic god Apollo, was especially famous and played an important historical role as a focal point of divination. In addition, Delphi served as a setting for diplomatic relations among the delegations visiting the oracle. The Pythian Festival held every four years ranked with the Festival of Olympia as a celebration of folk religion, and it also flourished as a occasion for sports and cultural exchange.

The by-products accompanying the pilgrimage also were important. For example, in an age when mass media were undeveloped, pilgrims gathering at the sacred place brought information from inside and outside the country, and thus Delphi served as an information network, a place for receiving, processing, and sending information. Officiates who gathered and made use of the information increased the accuracy of the oracles, which enhanced their fame, but on the other hand, this also gave birth to the fact that the oracles were used by polis and countries for political purposes.

### は じ め に

筆者は、2000年来「四国遍路と世界巡礼」共同研究に参加し、古代ギリシアの巡礼について研究を行ってきた。これまではエピダウロス Epidaurus に展開したアスクレピオス Asclepius の治療祭儀について考察し、心身の病を患った人々が医神アスクレピオスによる治療を求めて各地から巡礼し、目的を達成した暁にはお礼の奉納を行なったことをみてきた。そこでのギリシア人の心性は、来世での安寧を求めての巡礼ではなく、あくまで病氣治癒といった現世利益を求めての巡礼であった。

古代ギリシアでは、出産、結婚、商売等の私的な事柄から、祭儀や国制の変革、植民地活動や和戦の決定等国家に関わる公的な事柄まで人智を超える裁断を預言の神アポロンに求めての巡礼も行なわれた。デルフォイ Delphoi (アポロン神)のほか、エペイロス地方のドドナ Dodona (ゼウス神)、小アジアのディデュマ Didyma (アポロン神)などが有名な神託所であるが、国内外から多くの人々が神託を伺うためにそれぞれお気に入りの神託所に巡礼を行なった。とりわけバルナッソス山の急峻な南斜面に位置している預言の神アポロンの聖域デルフォイは有名で、392年にローマ皇帝テオドシウス帝 Theodosius の異教禁止令によって閉鎖されるまで、神託の中心地として重要な役割を果たしてきた。またデルフォイは神託伺いに訪れた使節団によって外交の場として利用されたほか、4年毎に開催されたピュティア祭はオリンピア祭と並ぶ民族宗教祭典で、スポーツや文化の交流の場としても繁栄した。

さらに巡礼に伴う副産物も重要である。例えばマスメディアの発達していなかった時代にあって、聖地に集まる人々が各地の情報をもたらし、そこで聖地は情報の受容と集積、発信の場となった。神官らによって情報が収集・活用されることにより神託の精度は高められ、ますますその名声を高めていくが、そのことが逆に諸ポリス・諸国家によって神託が政治的に利用されるという側面も生み出した。

本稿ではデルフォイ巡礼を採り上げ、アポロンの神託がどのような手順で行なわれていたのかを概観し、そこで展開された情報センターとしての機能、さらに古代ギリシア人の心性について考えたい。

## 1. アポローンの神託の手順

1829年から始まったフランスの考古学調査隊による発掘によって、紀元前15世紀にはすでにこの地が聖地であったことが明らかとなったが、もともとは大地母神ガイア Gaia とその娘テミス Themis の聖所で、ガイアの子ピュトーン Python (大蛇) に守られ、この地母神によって神託が行なわれていたが、紀元前9世紀に新来者のアポローンがそれにとって替わって神託を授けるようになり、紀元前8世紀初頭にはアポローン信仰の場としての神域が確立したといわれている。ギリシア世界が拡大した植民運動時代(紀元前8～6世紀)にはデルフォイの神託の名声は高まり、国際的な神域にまで発展していった。

そもそもデルフォイでピュティアによる神託が行なわれるようになった経緯について、紀元前1世紀の歴史家ディオドロス Diodorus Siculus は、コレタスという山羊の番人が神託の霊気を噴く大地の穴を発見したが、時が経つにつれ霊気を浴びた人々がその穴に飛び込むようになり危険となったので、それを避けるために代表して予言をする巫女(phythia)として処女を選んだ。しかし神託伺い人の中に不埒者がいて情欲を掻きたてられて巫女を犯すという出来事があってから、50歳を越えた女性によって神意が告げられるようになったと語っている(Diod., *Bibliothekē*, 16, 26)。パウサニ阿斯 Pausanias も牧人たちが羊の群れを追っているうちに偶然この託宣所に行き当たり、蒸気のせいで神懸かりになってはアポローンの下す神託を伝達したが、世評では最初の託宣代行巫女はフェモノエで、6脚韻の韻律を歌った最初の女性と述べている(Paus., X, 5, 7)。但し地質学者の言うところによれば、このような地層ではかつてそのような大地の割れ目が存在したことなどあり得ないと否定する。

では、実際そこではどのような手順で神託が行なわれていたのだろうか。周藤芳幸氏によれば、神託は年に1回アポローンの誕生日(ピュシオス月、現在の2、3月に相当)の第7の日に授けられていたが、後に神託伺い人の増加に伴い、毎月第7の日(アポローンが不在の冬の3ヶ月は除外)に行なわれるようになった。神託日の数日前から、私人や公人が入り混じった巡礼者たちは旅館や大衆宿泊所、野天で宿泊しながら当日を待った。この間デルフォイの町は巡礼者相手の商売で潤ったという。

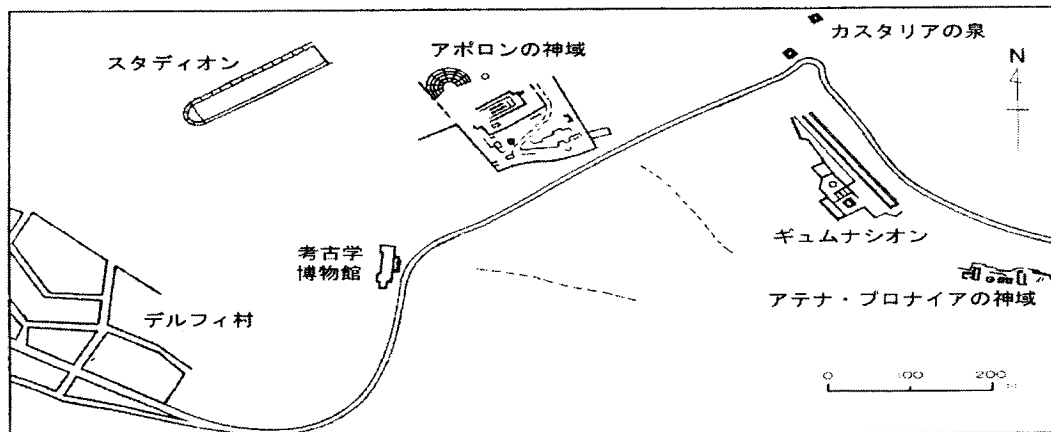


図1 デルフォイ遺跡配置図(出典:周藤芳幸『古代ギリシア遺跡事典』、132頁)

神託当日については、P. ファンデンベルクの説明に沿ってみたい。早朝日の出前に2名の神託祭司(profetēs)らに伴われて巫女は、公衆に気付かれずファイドリアデス峡谷端のカスタリアの泉で、沐浴する清めの儀式を行い、さらに神域内のアポローン神殿の上方の建物の中にあつたカソティスの泉の水を一口飲んで予言の力をつけた。そこから巫女の一行は「浄められた者」を意味するデルフォイの名門出身者である5人のホシオイ(hosioi)に護衛されながらアポローン神殿に入った。神殿内の中央に鎮座するヘスティアの炉の前では、白大理石の床に生きている仔山羊を曳き据え、冷水を引っ掛けて吉凶を占った。すなわち仔山羊がブルブルと震えれば吉であり、動かなければ凶兆とされ、この日の神託伺いは中止となった。

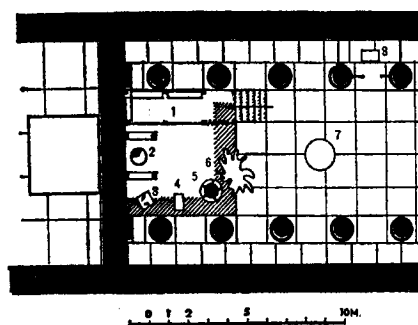


図2 北西側からみたアポローン神殿(筆者撮影)

一方、髪を月桂樹の枝で飾り、緋色の衣を脱いで簡素な白い短衣となった巫女がヘスティアの炉の前に立つと、神託祭司は掻き起こされた松材から朦々と煙が立ち上る火の中に薫香、ヒヨス草、アヘンなどのあらゆる麻薬的な燻し物を巫女が恍惚状態になるまで焼べた。巫女は内陣で礼拝の儀式を済ませると奥の一段低くなったアダウトン (adyton、至聖所) に降り、三脚鼎 (tripous) の上に坐った。

他方、屠殺された犠牲獣は神殿の外のキオスの祭壇で焼かれ、その立ち上る煙が神託所開場の合図となった。神託伺いを希望する巡礼者たちは、カスターリアの泉で清めを行なったあと、まだ閉ざされている神殿入口前に蟬集し、少しでも前にと我先に押し寄せた。但し前列はデルフォイへの貢献故にプロマンティア (Promanteia、神託請願優先権) を授けられた人々のために確保されていた。例えばヘロドトスは、リュディア王クロイソスはデルフォイ人1人宛金2スタテールを贈与した結果、デルフォイ人はクロイソスをはじめリュディア人に神託請願優先権、免税特権、祭礼行事の際の特別拝観権などを許し、また希望者にはデルフォイの永久市民権を与えると約束したと述べている (Hdt., I, 54)。神託は2人の巫女が交替で行なったが、それでも多くの神託伺い人は夕方になると門前払いになったという。その場合、遠方からの神託伺い人は帰国して出直すよりも翌月まで滞在する方が安上がりということで、1ヶ月の収入の如何許りかを確保できる宿泊所の主人を喜ばせた。

神託にかかる費用も決して安くはない。神託に際して神託伺い人は、参拝料は不要とされたが、直前にアポロン神殿の前にある大祭壇に蜂蜜菓子 (Pelanos) を供えなければならないが、祭司たちは抜け目なくそれを相手の地位や勢力によって高値で販売していた。さらに異邦人が単独でアポロン神殿に入って質問を提出することは認められておらず、実際の神託手続きには名望あるデルフォイ市民の介添え人 (Proxenos) に依頼しなければならなかった。ヘロドトスによれば、サラミスの海戦直前に、アテナイは神託を伺うためデルフォイに託宣使を派遣し、所定の儀式を行って神殿に入ると、アリストニケという巫女が絶望的な神託を下し、託宣使が極度の悲歎にくれた。その時アンドロプロスの子ティモンという、デルフォイで第一流の名士の列に入る男が彼らに忠告し、嘆願者の印であるオリーブの枝をもって出直し、嘆願者として再度神託を乞うように勧め、託宣使たちはその忠告に従い再度神託を伺い、「木の壁 (砦)」の神託を授かった (Hdt., VII, 140-141)。神託伺い人は介添え人に依頼してヘスティアの祭壇に仔羊か仔山羊の肉を供えるが、その費用を負担し、かつ供えた犠牲獣の一番良い部位を持ち帰らせた。このようにデルフォイでは金儲け主義が根を下ろしていたようである。



アダウトンの概念図 (1:300)。古代文献による理論的復元。  
1. 神託伺い人の室  
2. 円柱で支えられた天蓋の下のオンパロス  
3. アポロンの黄金像  
4. セメレの子ディオニュソスの墓石  
5. 神託の穴と三脚台  
6. 聖なる月桂樹  
7. ヘスティアの炉  
8. ポセイドニオン

図3 アデュトン概念図 (出典:P.ファンデンベルク、247頁)

神託祭儀において3つの用具が神器として重要な役割を果たしていた。

### 1. 三脚鼎

恍惚状態でアダウトンに降りた巫女は、神託伺い人とはカーテンで隔てられて両側に把手のついた鼎の上に坐っていた。三脚の鼎は元来煮炊き用の料理道具であったが、祭祀具として古くから使用されていた。三脚の上部には鉢あるいは鍋が据えられ、坐るための道具ではなかった。ディオドロスは神託所の縁起譚で、前述のように、山羊飼いのコレタスが大地の割れ目の縁に身を屈め、靈感を促す蒸気を吸って突然妙なことを語り、彼らの未来を予言して以来、牧人たちは割れ目を使って予言をし合ったが、次々に穴に吸い込まれ、消えてしまった。そこで1人の女性を選んで巫女にし、道具を作り巫女をその上に乗せて安全に靈感を受けることができるようにしたという (Diod., 16, 26)。ストラボーンは「神託所はそれほど大きくない開口部を有する垂直洞窟で、そこから忘我状態を喚起する蒸気が立ち上り、その穴の上に高く聳え立つ三脚がある。そこにピュティアが上り、蒸気 (Pneuma) を吸って予言する」 (Strab., IX, 3-5) と述べている。また三脚の鼎は大地の穴の上に据えられて常に霊気を浴びたため、それ自体霊気をもつようになり、神託に欠かせない聖具となったという説もある。いずれにせよ鉢の凹みに腰をおろし、垂直に立つ把手に掴まって身を支えて神託を下していたのだろうが、足が床につかない何とも不自然な椅子に坐って神託を下



図4 神託を告げる巫女姿のテミス (出典:H.Bowden, 表紙)

していたといえる。

## 2. 月桂樹

アポローンの神木であった月桂樹がアデュトン内に直植えされ、その上部の屋根には開口部が設けられていた。そこからヘスティアの炉の煙も排出できるようになっていた。また月桂樹は常緑樹で芳香を放つので、聖なる木とされた。浄化の力、占いの力があるとされ、そこで巫女は予言の前夜を月桂樹の葉で設えた寢床で過ごし、また鼎に乗る前にも月桂樹の葉を嚙んで自らを陶醉状態に導いたという。

## 3. オンファロス（臍石）

オンファロスは半卵型をした石で、結び目をつけた毛糸が巻き付けられてあった。太古の人々は、地球は外側を大洋（オケアノス）の流れによって囲まれた円盤状で、その中心にオンファロス（臍）があると考えた。ギリシア神話でも、ゼウスが地球の中心を求めて両端から2羽の鷲を放ち、それが出合った場所がデルフォイであるといわれている。また別の神話では、時間の擬人化である祖神クロノスは、自分の子供達が自分を打倒して世界の支配者になるという不安から生まれてくる子供達を片っ端から呑み込んだ。そこで妻のレアはゼウスが生まれると小さな子供位の大きな石をむつきに包んで夫の口に放り込むとクロノスはこの固い食物を吐き出した。ゼウスは後にその石をパルナッソス山麓に置いた。それがオンパロスであるという。これより後に作られた神話では、アポローンがデルフォイに渡来する以前は豊穡多産の神ディオニュソスがここでは優先権を占めていたから、オンファロスがゼウスの子ディオニュソスの墓石となり、アデュトンにディオニュソスの墓がある所以と説明されている。

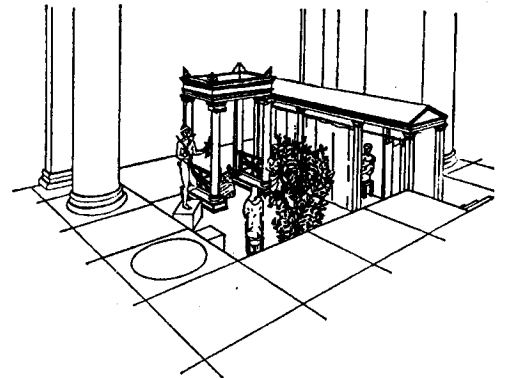


図4 アデュトンの復元図  
(出典：P. ファンデンベルク、237頁)

P. ファンデンベルクは、巫女が三脚台に坐る時、片手でオンファロスの毛糸を、もう一方の手で月桂樹の枝をもったが、この毛糸による不可思議な祭儀の背後には、大地の隠された力との結合という象徴的意義が潜んでいると指摘している（『神託』、228頁）。神託はそれぞれの神託所で異なるやり方で行なわれたが、デルフォイでは、巫女は3つの神器から靈感を受け、朦朧状態で予言をする。そこでは巫女は霊媒者であり、語る言葉は巫女を通してアポローンが語るものであり、従って神託は全て1人称で表現された。

## 2. 巫女の託宣

P. ファンデンベルクによれば、初期のデルフォイの神託では、巫女は憑依状態に陥ることはなく、問われた神託に対して壺に入れた籤（ソラマメ）を取り出すだけで、白（イエス）か黒（ノー）のソラマメで回答するという単純なもので、何の予言能力も必要としなかったといわれている。

古典期では、このような偶然に委ねられるのは貧乏人に答える時に限定され、第7の日に行なわれる通常の神託は、超心理学的、権力的、政治的、物質的関心で組み立てられたメカニズムで行なわれたとされる。

ピュティアの神託回答は原則として口頭で授けられた。毎日繰り返される幸運と成功への問いかけ（結婚問題や商売のこと、立身出世や訴訟事等）のようなイエスかノーで答えられる個人的問題に関わる質問には口頭の回答で済まされた。但しポリスが使節を送った第3者に対する回答は、神託祭司によって書き記されたが、その際祭司の手で詩的な韻文体に直す場合もあった。中には金銭をもらって神託の回答に文学的に手を入れる者もいたという。ところが時代が下るとデルフォイの神託所が大いに繁盛したこともあり、韻文に直している暇がなくなった経緯についてはプルタルコスの「ピュティアは今日では詩の形で神託を降ろさないことについて」（『モラリア』394E-09D）に詳しい。当時の平和な環境にあっては、もはや神託に求めるものは大したことのない日常的な事柄で、例えば、結婚すべきか、航海をしてもよいか、金を貸してもよいだらうかといった類いのものであり、ポリスの関心事も収穫とか牧畜とか人々の健康とかに関するものであり、それらに韻文で回答する必要はないといっている（『神託』223、242-246頁）。

デルフォイでの神託祭儀はかなり世俗的であった。というのは、この地の神託の需要が多いため質問を書面で提出できるのはポリスや国家を代表する使節に限定された。その理由は①使節たちは文書にまとめた質問をポリスから携えて来ており、回答は使節個人になされたものではないから、帰国後、託宣を言葉通りに再現するためには文字で記録しておく必要があった。②求められる回答に関して、神託所が特に影響するところが多い問題には当然慎重であり、そのため時間がかかった。また文書による質問は神託祭司たちの資料として利用され、難問が起きると、それは基礎資料となった。このように使節が自国に持ち帰った文書回答は、国家代表

に提出され、それを受けて最高意思決定機関である民会で議論され、決定された。デルフォイが発信した神託内容の最終責任は、それを受け取り、その意味を解釈した神託伺いを行なった側にあるということになる。ヘロドトスが語るサラミスの海戦直前のデルフォイの神託では、絶望的な託宣に悲嘆にくれた託宣使たちは再度神託伺い人としてオリヴの枝をもって出直し、神託を請うた。それに対し巫女は「パラス（アテナ）がいかに言葉を書き留め、賢しき才覚を用いて嘆願しようとも、オリュンポスなるゼウスの御心は動かすことは叶わぬぞ。されどわれは再び汝のため鋼にも比すべき硬く破れぬ言葉を告げてとらせよう。ケクロプスの丘と聖なるキタイロンの谷の狭間に抱かれる土地悉く敵の手に陥る時、遙かに見はるかし給うゼウスはトリトゲネス（アテナ）がために木の砦をば、唯一不落の壘となり、汝と汝の子らを救うべく賜るであろうぞ。また汝は陸路迫り来る騎兵の群れ、歩兵の大軍を安閑として待つてはならぬ。背を翻して退避せよ。やがてまた反撃に立ち向かう時もあるぞ。おお、聖なるサラミスよ、デメテルの賜物の蒔かれる時、あるいはその採り入れの時に、そなたは女らの子らを亡ぼすであろう。」(Hdt., VII, 141, 松平千秋訳)の託宣を下した。託宣使らはその託宣を書き留めてアテナイに帰国し、市民に報告すると、その託宣の真意を巡って議論が百出したが、殊に2説が判然と対立した。すなわち老人の一部は、昔アテナイのアクロポリスは茨の垣を巡らしていたから、「木の砦(壁)」とはアクロポリスを指すものと考え、アクロポリスが無事に残ることを神は告げたと説いた。一方、神のその言葉は船を指すものであると説く者で、彼らは余事を放擲して船艦を整備すべきことを要求した。そのリーダーがテミストクレス Themistocles で、多くのアテナイ人は彼の勧告に従った。

このようにペルシアの大軍がテルモピュライを突破し、北方からアテナイのすぐ間近まで進軍してきた緊張状態のなかで、ギリシア最強のポリスといわれたアテナイが国家の命運を決する決断をデルフォイの神託に託している。古代においては、国家が敗北すると言うことは、市民にとっては自らが虐殺されるのみならず、親、妻子らは自由な身分を剥奪され、奴隷として隷属の日々を送らなければならないという民族の将来にかかわる重大事であった。それを神託という神意に問うのである。しかもアポローンの神託は一回限りの絶対的不動のものではなく、現にアテナイの託宣使は、絶望的な内容で到底持ち帰ることができなかつたので、デルフォイの名士の口添えで、再度神託伺い人として神託を乞うている。要するに意に叶わない神託が下された場合、神託のやり直しを求めることができたということである。

神託は恍惚状態の巫女が謎めいた不明の内容を口走り、それを神託祭司が韻文で書き換えて神託伺い人に渡した。後はそれをどのように解釈するかが問題となる。「木の砦(壁)」の場合も、何とか持ち帰れる内容と思われた時、使節たちは託宣を書き留めて帰国し、民会に報告している。そしてそれを受けて市民総会である民会で活発な議論が行われ、最終的には多数決でその意志を決定している。国家の命運を左右する政治的決断をアポローンの神託によって決定するところに古代ギリシア人の心性の特徴を見ることが出来る。ところで神託をアクロポリスと解釈した者たちはペルシア軍の襲来に際してはその判断に従ってアクロポリスに籠城した。結果的に彼らは全て虐殺された。このことは神の意志である神託を誤って解釈したということで、責任は全て解釈する側にあり、デルフォイは神託内容にその責任を負わず、非難されないのである。

しかもこの神託には裏があった。プルタルコス(Plut., *Themist*, 10)によれば、その頃神域から姿を消した蛇の件で、毎日供えられていた初穂が手付かずのままであることを発見した神官たちは、テミストクレスの言い含み通り民衆に向かって、女神アテナは諸君の先導となって既に国土を後にしておられると布告し、テミストクレスは神託の力で民心を動かそうとして、「木の砦(壁)」はその意味するところは船に他ならない、と民会を説得して、国土はアテナイを守護し給うアテナ女神に委ね、壮年にある者は全員三段櫓船に乗り組み、各人は妻子並びに奴隷の安全をできる限り計るべきこととした。この決議案が承認されると、大多数のアテナイ市民は女子供をトロイゼンに疎開させることにしたのである。このように巫女・神託祭司は時としてテミストクレスの事例にみられるような買収によって言いくるめられ、その意に叶うような託宣を下す場合もあった。すなわち政治的に利用されたのである。

### 3. 情報センターとしての機能

リュディア王クロイソスはどのようにして異国のデルフォイ神託を信奉するようになったのか。

それについてヘロドトスは次のように述べている。ペルシアが日毎に強大化する事態に、その前に何とかしてその勢力を抑制することを決意したクロイソスは、直ちにギリシア及びリビアにある諸々の神託所に使者を派遣し神託を伺わせた。その真意をたぐすため、ギリシアではデルフォイ、ポーキスのアバイ、ドドネ、テーバイのアンピアラオス、トロポニオス、ディデュマの神託所に使者が送ったが、一方リビアでは、アンモン(ゼウスと同一視)の神の許へ別の者を派遣して神託を伺った。クロイソスの意図は、それらの神託が信頼に

足るべきかを試してみて、もし真実を告げるものであると判断できたなら改めてそこへ使者を派遣し、ペルシア出兵を断行してよいかどうかを訊ねるつもりであった。そこでリュディア人の使者たちに彼らがサルディスを出発した日から数えて100日目に神託を求め、リュディア王であるクロイソスが現在何をしているかを問い、そしてそれぞれの神託が告げたところを記録してクロイソスの許へ持参するよう命じた。

デルフォイに派遣されたリュディア人たちが神託を伺うため本殿に入り、命ぜられた質問をしたところ、デルフォイの巫女はヘクサメトロス（6脚韻）の調子で次のように答えた。

我が知る真砂の数も海の広さも、  
啞者の心を悟り、物言わぬ者の声を聞く。  
堅き甲羅の亀の匂いがしてきた、  
青銅（からかね）の鍋に山羊の肉と共に煮えたる亀の匂いが。  
その下に青銅敷かれ、青銅はまた上にもあるぞ。

使者たちは巫女のお告げを書き留めて、サルディスに帰った。各地に派遣されたその他の使者もそれぞれ神託を持参して帰ってきた時、クロイソスは神託を書き記した巻物の一つ一つ拵げて読んだ結果、デルフォイの神託の正確なことを認め、デルフォイの神託こそ唯一の神の神託であると信じたのであった。というのは、彼は諸方の神託所へ使者を送り出すと、定めておいた日を狂わさぬようにして到底言い当てることのできないような策略を巡らした。すなわち彼は、亀と小羊を切り刻み、自らこれを一緒に青銅の大釜に入れ、青銅の蓋をして煮たのであった。

そこでクロイソスは莫大な犠牲を捧げて、デルフォイの神の恩寵を得ようとした。あらゆる種類の犠牲獣3000を屠り、巨大な薪の山を築いて金銀の金具を打った寝椅子、黄金製の皿、紫紺の衣裳、肌着の類を焼いた。これらの犠牲を捧げることによって一層神の恩寵に与れるものと期待したのである。その他、一々挙げるほどでもない多数の品を奉納した（*Hdt.*, I, 46-50, 松平千秋訳）。

これに関してP. ファンデンベルグは、リュディア王が仔羊と亀の肉を入れた鍋の前にいるという奇想天外の行為に対して、デルフォイは神事とは懸け離れた、機密諜報機関という近代的な方法を使っていたと推測する。ファンデンベルグは、近代国家ならどこでもこの種の機関を備えているのは当然であるが、史上最も重要で最も繁栄した神託所であるデルフォイの場合は、時勢に乗って発展してしまったものであり、神託祭司たちの手許に集積される情報を利用したからと言って非難するには当たらないという。人はいつ神託所を訪れるのか。それは危機や葛藤の状況下で敵味方の区別なく、各地から海陸を利用してしばしば何ヶ月もかけ、神託を求めて切実な思いで旅をした。また神託が凶兆だった場合には伺い人はさらに丸まる1月デルフォイに滞在しなければならなかった。その間祭司ら関係者は神託伺い人や介添え人から守秘義務を誓った上で情報を聞き出すことができた。一方、デルフォイの神託所を訪れることなど一生に一度あるかないかで、しかもよほどの重大な問題がなければ行くこともなかったし、何よりピュティアの回答のことで頭の中が一杯であった神託伺い人の精神状態は例外状況下にあったため、神託伺い人は祭司らからの出す質問に喜んで答え、その結果情報提供者となった。祭司らにとって神託伺い人から情報収集することはごく日常的なことで、依頼人たちを冷めた頭と正確に範囲を定めた目標設定をもって取り扱うことができたのである。そこで神託祭司らは伺い人の質問内容を介添え人が巫女に問いかける前から知っていたことは充分にあり得たという。それ故、伺い人が神殿に足を踏み入れるとまだ一言もしゃべらないのにピュティアが語り始めるという事態がしばしばあった。すなわち全知の神託所は問わなくても託宣を下したのである。またデルフォイでは顧客カードが整理され、神託神殿に保管されていた可能性を推断し、これによって神託所の「全知」の多くのこと、ことにピュティアが口にした無数の人名の説明ができるとしている。そしてデルフォイにやって来た各々の伺い人たちが他の伺い人のための情報提供者になっていたのであり、デルフォイは諜報機関として情報蓄積と情報のネットワークを構築していたのであった。とすればクロイソス王の試しにデルフォイが合格したのも比較的簡単に答えられるとし、理論的にはリュディア王の使節は文書による回答をサルディスに持ち帰り、それをクロイソスに渡したが、デルフォイが至る所に諜報員や通報者を配置していたとすれば、あとは祭司たちがリュディアの使節をあとしばらくデルフォイに留めておく必要があった。その間に諜報員がクロイソス王の行為をサルディスからデルフォイに伝えることができたのである。リュディア人の使節は旅程に100日間の猶予があったのだから、神託伺い前にデルフォイに到着していた。そこで神託祭司が、予めリュディア人から用向きを聞き出して、諜報員を手配する時間は充分にあったはずであり、諜報員が帰ってくれば、あとは祭司が神託伺いの直後に渡した封印済の（恐らく白紙）書簡を、正しい回答を記した斧ものとり替えるだけでよかったと結論している（『神託』、253-287頁）。これは確かに魅力的な解釈であるが、あくまで1つの仮説である。

#### 4. 古代ギリシア人の心性

一神教のキリスト教と異なり、古代ギリシアはあらゆるものに神が存在するという多神教の世界であり、信仰には寛大であったといわれている。ギリシア人は先祖伝来のしきたりに則り、宗教儀礼を実践することで神への敬意を示し、それに対して神からの恩寵を受けるという相互授与の原理で巡礼を行なった。そこにはキリスト教的な来世での救済を求めての巡礼ではなく、あくまで現世利益を求めてなされたものであったことは、エピダウロス巡礼とも共通するギリシア人の心性であった。

実際の巡礼の目的は多様であったが、今回採り上げたデルフォイ巡礼は、人智を超える判断を神の裁断に仰ぐための巡礼であった。人々は出産、結婚、商売等の私的な事柄から祭儀や国制の変革、植民地活動や和戦の決定等国家に関わる公的な重要事項に至るまで、現世的な利害に関わって預言の神アポローンや全能の神ゼウスらの裁断を仰ぐため各々の神の聖域へ赴いた。とりわけパルナッソス山の急峻な南斜面に位置しているアポローンの聖域デルフォイが神託で重要な役割を果たしていたことは明らかである。国内外の王国や諸ポリスから派遣された使節団は神の裁断を仰ぐという形で現世利益を求めて嘆願し、成就した暁にはお礼として持てる最大限の財貨を奉納した。参道にはそれらを収める宝庫が建ち並び、それがまた巡礼者にデルフォイの名声を確信させた。このように古代ギリシア人は託宣などによって神から授かった恩寵に対して、感謝の気持ちを持てる最大限の財貨を奉納することで、具体的に見える形のパフォーマンスにより更なる神の恩寵に与ることを期待したのであった。

さらにデルフォイ自身、神託所をキーステーションに各地に情報ネットワークを張り巡らして各地の情報収集を図り、蓄積されたデータによる科学的分析に基づく神託が行なわれていた。その結果、デルフォイは訪れる巡礼者の信頼を得、ますます多くの巡礼者の来訪を招来した。

#### ま と め

デルフォイはアポローンの聖地となる以前から神託所として有名であったが、その卓越した予知能力故に名声はギリシア国内外に及び、多くの巡礼者を呼び集めた。神託に求められるものはキリスト教的な来世での救済ではなく、あくまで現世での利益追求であることにギリシア人の心性をみることができる。またアポローンの聖地としての繁栄は、デルフォイに多くの富と経済力をもたらし、世俗的な繁栄をもたらした。一方、名声の高まりとともに国内外各地からもたらされた情報はデルフォイに集積され、それを聖域関係者が整理分類して情報センターとなることで、デルフォイの神託は科学的な情報分析が可能となり、それが神託の精度を高めるという相乗効果によりますます繁栄した。しかし時間の経過とともに宗教祭儀としての神託は変質し、政治的側面を強めた結果、デルフォイはギリシア諸ポリス、諸国家さらにはローマ国家などの政治権力に翻弄され、遂に362年「もはや泉は尽きた」との神託を最後に、392年のテオドシウス帝の異教禁止令により聖域は閉鎖され、神殿群は破壊された。

#### <参考文献>

- M. Dillon, *Pilgrims and Pilgrimage in Ancient Greece*, Routledge, 1997  
H. Bowden, *Classical Athens and the Delphic Oracle*, Cambridge UP, 2005  
S. Hornblower & A. Spawforth eds., *The Oxford Classical Dictionary*, Oxford UP, 1996<sup>3</sup>  
Jean Chélini & H. Branthomme, *Histoire des Pèlerinages Non Chrétiens*, Hachette, 1987  
W. Burkert (J. Raffan trans.), *Greek Religion Archaic and Classical*, Blackwell Basil, 1985  
S. Price, *Religions of the Ancient Greeks*, Cambridge UP, 1999  
A. J. Graham, *Colony and Mother City in Ancient Greece*, Chicago, 1983<sup>2</sup>  
S. Marker & J. Pettifer, DELPHI, pp.443-473 in *BLUE GUIDE GREECE THE MAINLAND*, Somerset Books, 2005<sup>7</sup>  
Diodorus Siculus, C. L. Sherman (trans.), *Library of History Vol. VII*, Loeb Classical Library, Harvard UP, 1952  
P. ファンデンベルグ、平井吉夫訳、『神託—古代ギリシアをうごかしたもの』河出書房、1982年  
ヘロドトス、松平千秋訳、『歴史』古典世界文学10、筑摩書房、1976年；A. D. Godkey (trans.), *Herodotus*, Loeb Classical Library 4 vols., Harvard UP, 1975  
周藤芳幸・澤田典子、『古代ギリシア遺跡事典』東京堂出版、2004年  
プルタルコス、馬場恵二訳、「テミストクレス伝」（訳者代表村川堅太郎、『プルタルコス』古典世界文学22）、筑摩書房、1976年；“Themistocles” in Bernardote Perrin (trans.), *Plutarch's Lives II*, Loeb Classical Library, Harvard

UP, 1968

プルタルコス、丸橋裕訳、『モラリア 5』京都大学学術出版会、2009年；F.C.Battitt (trans.), *Plutarch's Moralia V*, Loeb Classical Library, Harvard UP, 1969

パウサニアス、馬場恵二訳、『ギリシア案内記』下 岩波文庫、1992年；Pausanias, W.H.S.Jones (trans.), *Description of Greece X*, Loeb Classical Library, Harvard UP, 1965

藤縄謙三、『歴史の父ヘロドトス』新潮社、1989年

桜井万里子、『ヘロドトスとトゥキュディデス—歴史学の始まり』山川出版社、2006年

周藤芳幸、『図説ギリシア—エーゲ文明の歴史を訪ねて—』河出書房新社、1997年

R. フラスリエール、戸張智雄訳、『ギリシアの神託』クセジュ文庫、白水社、1963年

K. ケレーニイ、高橋英夫訳、『神話と古代宗教』新潮社、1972年

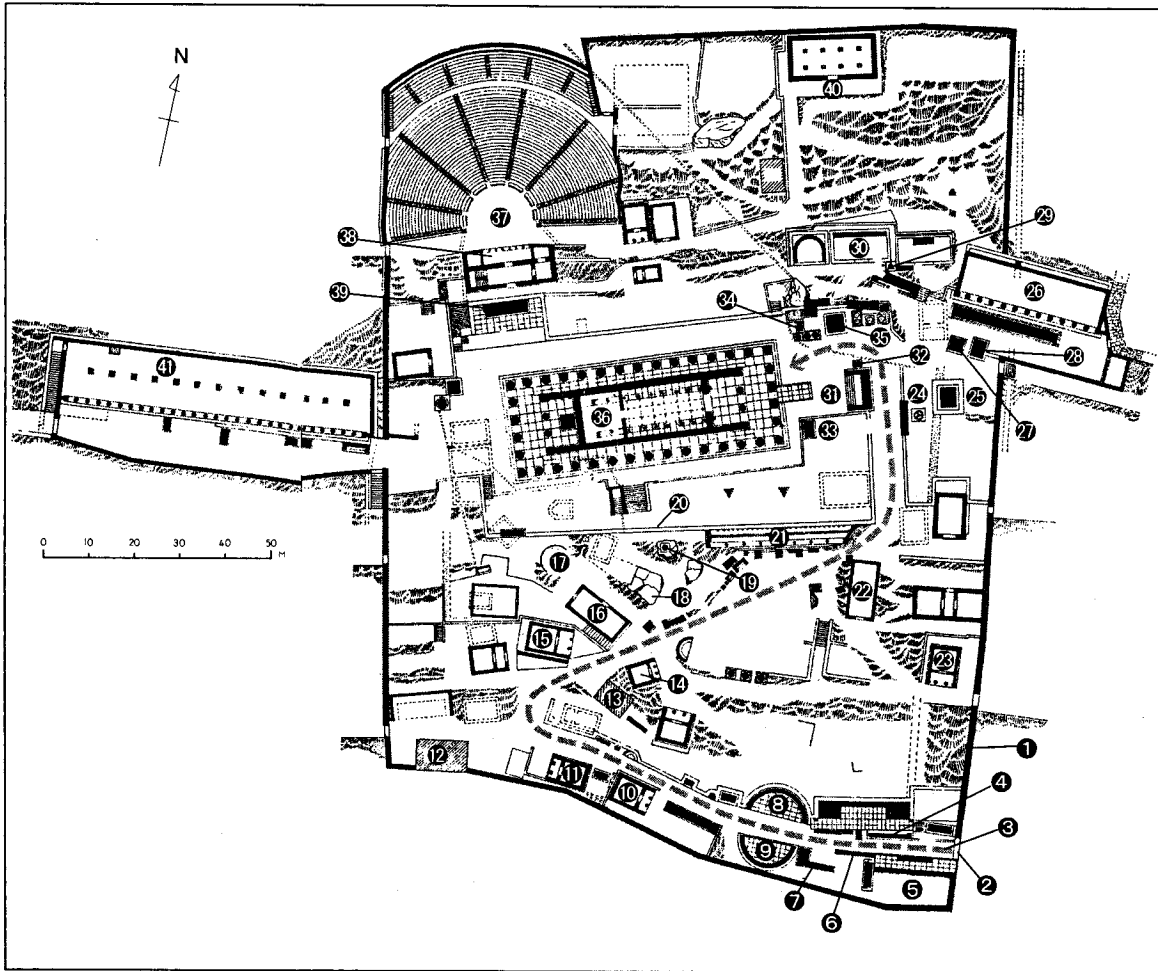
拙稿、「古代ギリシア・デルフォイの神託と情報伝達」（愛媛大学資料科学研究会編『歴史と文学の資料を読む』創風社出版、2008年所収）、157-176頁

デルフォイ <http://muso.to/g-derufi-kai.htm>, 1-7頁

### 参考資料1 <デルフォイ略史>

ミュケナイ時代	アテナ・プロナイア神域での大量の女神をかたどった土偶出土→末期に集落破壊
8世紀BC初頭	アポローン信仰の場としての神域確立
8～7世紀BC	大植民時代＝ギリシア世界の拡大→デルフォイ神託の名声（ <i>Hdt.</i> IV, 151-159）
7世紀BC	国際的神域に発展（フリュギア王ミダス、リュディア王ギュゲス） 後半にはコリントス僭主キュプセロスが最初の宝庫建立
6世紀BC 繁栄期	有力ポリスが相次いで宝庫建立 リュディア王クロイソスが莫大な黄金等奉納（ <i>Hdt.</i> I, 50）
548年BC	アポローン神殿焼失→エジプト王、リュディア王による巨額の寄付により再建
c. 595～c. 590	第1次神聖戦争（vsクリサ）→デルフォイは正式に独立し、アンフィクティオニア（隣保同盟）がアポローン神域を管轄→ピュティア祭の再編
492～479年BC	ペルシア戦争でギリシア勝利→戦勝記念碑や群像を聖道沿いに建立
448年BC	第2次神聖戦争→フォキスによるデルフォイ領有を巡る戦争
4世紀BC	中葉以降マケドニアのフィリポス2世によるギリシア制覇
358～346年BC	第3次神聖戦争（vsフォキス）→フィリポス2世の介入→ギリシア中・南部に影響力行使の契機
339～338年BC	第4次神聖戦争（vsアンフィッサ）→アンフィクティオニア軍最高指令官に選出→ギリシア中南部に合法的に軍侵攻し、アンフィッサを占領
338年BC	カイロネアの戦い→ギリシア世界の覇者
279年BC	アルプス以北からガリア人侵入→デルフォイ防衛の中心がアイトリア連邦 ペルガモン王アッタロス1世やエウメネス2世らが神域の修復や寄進を行ない保護
189年BC	ローマの支配
86年BC	スッラ軍の攻撃で被害→アウグストゥス、ドミティアヌス、ハドリアヌス帝らによる神域の復興→漸次的にアポローンの神託の威信は低下
AD330年	コンスタンティヌス帝が新都コンスタンティノポリスを造営した際、デルフォイから多くの奉納品やモニュメントを略奪
362年	ユリアヌス帝がデルフォイの神託復興のため何をなすべきかの神託伺いに対し、巫女は神域の終焉を預言する神託を下したのが最後の神託
4世紀末	テオドシウス帝による異教の禁止により聖域は閉鎖
1676年	度重なる地震や地滑りで埋もれた神域を再発見
1840年	ドイツのミュラー、ルクティウスらが部分的な調査
1892～1903年	フランス考古学研究所によって本格的発掘→デルフォイの神域が再現





- |                   |                |              |
|-------------------|----------------|--------------|
| ① 城壁              | ⑬ アテネ人の宝庫      | ⑳ 踊る少女の群像    |
| ② 主門              | ⑭ 評議会場         | ㉑ ダオコスの奉納群像  |
| ③ 聖道              | ⑮ ガイアとテミスの神域   | ㉒ アポロンの祭壇    |
| ④ アルカディア人の奉納群像    | ⑯ シビュラの岩       | ㉓ エウメネス2世の像  |
| ⑤ 神々とスパルタの将軍の青銅群像 | ⑰ ナクソスのスフィンクス像 | ㉔ パウルスの像     |
| ⑥ マラトンの戦勝記念群像     | ⑱ ポリゴナル式の石壁    | ㉕ ブルシ阿斯2世の像  |
| ⑦ テーベ攻めの七将の群像     | ㉑ アテネ人のストア     | ㉖ アポロンの像     |
| ⑧ アルゴス王族の群像       | ㉒ コリントス人の宝庫    | ㉗ アポロン神殿     |
| ⑨ エピゴノイの群像        | ㉓ キュレネ人の宝庫     | ㉘ 劇場         |
| ⑩ シキュオン人の宝庫       | ㉔ プラタイアの戦勝記念碑  | ㉙ プロスケニオン    |
| ⑪ シフノス人の宝庫        | ㉕ 太陽神ヘリオスの戦車   | ㉚ クラテロスの奉納群像 |
| ⑫ テーベ人の宝庫         | ㉖ アッタロス1世のストア  | ㉛ クニドス人のレスケ  |
| ⑬ シラクサ人の宝庫        | ㉗ アッタロス1世の像    | ㉜ ストア        |
| ⑭ クニドス人の宝庫        | ㉘ エウメネス2世の像    |              |

(出典：周藤芳幸・澤田典子、『古代ギリシア遺跡事典』、136頁)

本報告は、平成19～21年度科学研究費補助金（基盤研究（B）一般「四国遍路と世界の巡礼 その歴史的諸相の解明と国際比較」：研究代表 内田九州男、課題番号：09320097）による研究成果の一部である。